

## 月の花挽歌 ～12. 末摘花～

### 12-3

馴染みの薄い土地で夏休みを迎えて、精神的な疲れが溜まっていると見受けられる姪っ子を労おうとして、いつもとは違う場所設定までもしたランチへの誘いだつたが、会話は噛み合わずにギクシャクしていた。何とか修復しようと思った彩は、挑発的な口調で訊いてきた源氏物語の話には答えないで、

「わざと一線引いてるの？」とストレートに切り出した。

「えー、なんでそう思うのですか？」と真紀はドギマギした様子で訊いてから、しばらく考えていたが、「私、何か変ですよ」と自虐気味に言葉を継いだ。

アブラゼミの鳴声を聞きつつ、姪っ子のセンチメントを察した彩は、微苦笑を湛えながらそうめんの残りを食べるようにと促した。

「もしかしたら真紀は、(零落した悲劇の姫君)対(いわくありげな独身の伯母)という幻想でも抱いたのかしら……。私だって、光源氏ほどの男になら翻弄されたいわよ」と彩は可笑しげに言って、真紀の反応を窺った。

「……、そんなことはありません。伯母さんの深読みです」と真紀は作り笑いで応えると続けて、「光源氏が相手の鼻が紅い女性につけたあだ名がベニバナだったので、お店の名前を掛け言葉にしたのかなと思っただけです」と箸を休めて言った。

「なるほどー。私、先走っちゃったわね！秘すれば花、かしら」

「私の口ぶりもリズム感が悪かったんです」

「なんで悪かったの？」

「……！」

「…？…！」

「…？…」

期待を抱いて入学した真紀は、4カ月が過ぎて、校風や学友には同調することはできたが、特に授業外での英語教師陣とのやり取りには物足りなさを感じていた。

2年生になると文系と理系にクラス分けするが、それが大学進学には有効な手段であっても、真紀の求めている課題には足かせになってもおかしくないと思っていた。

10歳の時に見た洋画が発端で、6年にも及ぶアメリカ文学への傾倒は、ある種の才能がもたらしたといっても過言ではない、かと言って、今の教育制度の仕組みで、そんな生徒の知的探求心をくすぐるのは難しい。

いつの間にかカウンターにもたれていた真紀は、彩が淹れた食後の水出し煎茶を飲みながら、次第にもどかしい胸の内を打ち明けていた。